

奈良県立万葉文化館蔵

「金沢文庫本万葉集断簡」解題

吉原 啓

【書誌情報】

(管理番号…イ1)

〔書写年代〕 鎌倉時代後期～室町時代初期

〔体裁〕 軸装

〔行数〕 三行

〔寸法〕 本紙 縦二七・〇cm 横八・一cm

軸全長 縦一〇二・五cm 横二一・八cm

〔字高〕 二七・〇cm (二行目最終字の下端、二行目一文字目の上端が若干切断されている)

〔料紙〕 雁皮紙(僅かに雲母あり)

〔収録歌〕 『万葉集』巻十二・三〇二〇番歌から三〇二二番歌

〔その他〕 極札ナシ

【解説】

「金沢文庫本万葉集」は、仙覚の文永本系統の『万葉集』の写本である。巻一・九・十八・十九の全部、巻七・十二・十三・十四の

断簡が現存している。「古筆名葉集」にこの本の断簡を「金沢文庫本」としているためにこの名称があるが、金沢文庫の印影はなく、同文庫に伝来した確証はない。書写者については不明なもの、巻一は飛鳥井雅世(一三九〇～一四五二)、巻九・十九は尊円法親王(一二九八～一三五六)の筆とする古筆家の極札がある。

冷泉家時雨亭文庫蔵「金沢文庫本万葉集」巻十八は縦三三・五cm、横二五・六cmの綴葉装であり、表紙は江戸時代の後補であるもの、綴葉装が当初の形態であったと考えられている^①。当館所蔵の一葉も、も綴葉装であったものを裁断したものであろう。

「金沢文庫本万葉集」の特徴とされる金界は、当館所蔵の一葉では、本紙の上端左および下端右に見られる横方向の線がそれである可能性がある。片仮名傍訓を墨書するが、二行目「人之可^{ヒトノ}知^{シルヘ}」の訓「ク」のみ青字で書かれる。返り点・堅点は朱で付されている。また、本紙上端から約三・〇cmの位置に、横方向に切断された痕跡がある。なお、本資料は、大和歴史館^②旧蔵資料である。

注

① 竹下豊「金沢文庫本万葉集巻第十八」(財団法人冷泉家時雨亭文庫編『金沢文庫本万葉集巻第十八 中世万葉学』朝日新聞社)一九九四年

② 現在の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の前身。昭和一五年に国民心身鍛錬のために開設した橿原道場内の施設として、大和国史館や橿原文庫が設立された。その後、大和国史館は昭和二四年に大

和歴史館に改称し、檀原文庫は昭和四五年に県立檀原図書館として独立・改称した。その際、大和歴史館所蔵の万葉集関係の稀観本等が檀原図書館に移管されている。そして、平成一三年の万葉文化館開館にあたり、これらの稀観本等が檀原図書館から移管された。本資料は、こうして当館に收藏されるようになったと考えられる。

【翻刻】

斑鳩之因可乃池之宜毛君乎不言者念衣吾为流
 絶沼之下從者將戀市白久人之可レ知歎為米也母
 去方無三隱有小沼乃下思余吾曾物念項者之間

斑鳩之因可乃池之宜毛君乎不言者念衣吾为流
 絶沼之下從者將戀市白久人之可レ知歎為米也母
 去方無三隱有小沼乃下思余吾曾物念項者之間

「金沢文庫本万葉集断簡」
 奈良県立万葉文化館蔵
 (本紙・原寸)